

夏藏対音資料からみた西夏語の声調

荒川 慎太郎

0. はじめに

西夏語とは、11世紀から13世紀にかけて中国西北部で栄えた西夏の言語である。現在では死語と化したのが、仏典を始め豊富な言語資料を残している。なかでも西夏語仏教文献には、夏藏対音資料とでもいふべき、チベット文字によって西夏語音を転写した興味深い資料が少なからず存在する。本稿では資料として、ロシア科学アカデミー東方学研究所サンクトペテルブルグ支部（以下、東方学研究所）所蔵の夏藏対音資料^{註1}を主に用いて、これまで体系的な研究がなされていなかった西夏語の声調について、チベット文字による転写表記から検討することを目的とする。結論として、西夏語の平声には高声調のまま平板な高平調を、上声には低声調から上昇する低昇調を推定する。

第一節では、本考察で扱った資料についての概要を説明する。第二節では、西夏語韻書における声調の記述と、西夏語の声調に関する先行研究に言及する。また他言語対音資料による考察を略述する。第三節では、チベット語の声調とそれを表記するチベット文字について、本考察に関係する事項を述べる。第四節では、本論として、夏藏対音資料に見られるチベット文字転写から西夏語の声調について検討する。第五節では、結論をまとめる。

0.1 本稿での表記

西夏語の例は、西夏文字、荒川による推定音の表記（参考資料参照）、韻書による声調と所属韻類、字義を記し、チベット語の例はローマ字転写を記した^{註2}。

() 内の数字は断片番号、行数、何文字目かを示す。

0.2 本稿での略号

本稿での略号は以下のものを使用する。

^{註1} 本稿で扱った文献の調査は、1997年12月、および1998年7月に、科学研究費補助金（国際学術研究「北・中央ユーラシアのチュルク系極小言語の調査研究」課題番号08041022、研究代表者庄垣内正弘教授）にもとづいて行なった。庄垣内正弘教授をはじめ、現地では東方学研究所所長E. I. クチャーノフ博士、同研究所所員K. B. ケビン博士ら、多くの研究者の指導と協力を得た。感謝の意を表すとともにここに記しておきたい。

^{註2} 夏藏対音資料におけるチベット文字の例と転写法については、3.0参照。チベット文字の転写については、本稿の内容上、C1C2の表記について、添前字+基字の場合はC1-C2のようにハイフンを入れ、添頭字+基字（または基字+添足字）の場合はC1C2のように表記して区別した。たとえばgとyの子音連続は添前字g+基字y、あるいは基字g+添足字yで表される。前者はg-y、後者はgyのように表記する。

Tan.－西夏語、Tib.－チベット語、Fr.－fragment（断片番号）、S.－Stein（大英博物館所蔵断片）。

1. 夏藏対音資料について

1.1 夏藏対音資料と西夏語音韻論への役割

仏教隆盛により西夏は大量の仏教文献を残したが、その中には西夏語音韻論の研究に重要な情報をもたらす資料も少なくない。例えば、西夏語－サンスクリット対音資料となる仏典中の陀羅尼や、一連の仏教語の音訳語などである。そればかりではなく、西夏語仏典には、西夏文字の隣にチベット文字による音転写が付された、いわば振り仮名をふられた、夏藏対音資料というべきものが存在する。

夏藏対音資料は、西夏語音韻論の研究に有用な他言語対音資料であると認められていたから、西夏語研究初期の段階から注目されていた。Nevsky（1926）の『西藏文字対照西夏文字抄覧』は、西夏文字334字種について、ネフスキーの推定音、字義、夏藏対音例、夏漢対音例が記された、現在でもなおその価値を失わない字典として知られる。また、以来、西夏語音を再構成する際の手がかりとしても利用されてきた²⁸³。本考察に關係する夏藏対音例については2.3で再述する。

1.2 東方学研究所所蔵夏藏対音資料

Driem and Kepping（1991: 119-122）には、本稿でも利用した東方学研究所所蔵の夏藏対音資料（Texts 1-20²⁸⁴）、および大英博物館所蔵スタイン収集品（Texts 21-24）について、各断片の体裁（書体、行数、字数など）と旧整理番号との対比が記されている。今回調査、分析した資料はいずれ別稿にて、その内容も含めてより詳細な記述を試みたいが、ここでは現在東方学研究所で付された最新の整理番号と、仏典の分類、体裁について簡単に述べておく。

東方学研究所所蔵の夏藏対音資料は、内容から、以下の三種に分類される。以下に各種の仏典の断片数、整理番号を示す。Fr. で示したのはケピン博士らによって再整理された断片番号である。

²⁸³ Wolfenden（1931）は、西夏語初頭子音に子音結合が存在すること、そしてそれが四川省ジャロン語の初頭子音に対応することを根拠に、西夏人の末裔がジャロン人であるということを述べた。西夏語－ジャロン語直系説はもちろん、チベット語の複合子音表記（添前字、または添頭字＋基字）が音価そのままに西夏語の初頭子音に対応するという説は、現在の研究者間ではほぼ否定されている。この仮説と王静如による反論については西田（1964: 8-10）に詳しい。

²⁸⁴ Driem and Kepping（1991）のText番号。これは photocopy を整理したものであるため、同一断片も含まれ、断片枚数が対応しないが、Texts 1-19が今回整理した1）、2）に、Text 20が3）に相当する。

- 1) 名称不明七言偈文 (6断片) No. 8362, Fr.1, 2, 3, 4, 5A, 5B
 2) 名称不明仏典 (11断片) No. 8362, Fr.1(6), 2(7), 3(8), 4(9), 5(10), 6(11)²⁶⁵, 7(12), 8(13), 9(14), 10(15), 11(16)
 3) 『金剛般若波羅密經』 (1断片)²⁶⁶ No. 8299

1) は、大小6断片(縦24cm×横12~38cm)からなる七言偈文で、もともとは卷子本とおもわれる写本である。七言偈文は一行上下二段に記され(1行14字)、西夏文字の右側にチベット文字の振り仮名を持つ。これまで一断片も公開されておらず、今後調査・分析を要する資料である。

今回の調査で、これらの断片のうち四点は、Fr.5A→5B→4→1の順に一続きであったが、断片化したものであることが判明した。

2) は、それぞれ縦27cm×横15~31cmの断片(1行22字~25字)で、本来は卷子本写本であったと考えられる。11断片に分かれているが、おそらく一続きの仏典であろう。西夏文字の右側にチベット文字の転写を持つ。途中でチベット文字の書き手が交代したためか、二断片のチベット文字の線は極端に細く、筆跡が変わっていることが確認できる。

今回の調査により、諸断片は実際には、それぞれ、Fr.3(8)→9(14)→1(6)と4(9)→7(12)と11(16)→10(15)とが、順に一続きであったものが、断片化したものであると判明した。

3) は、縦20cm×横9cmの比較的小さな一断片で、1行12文字、6行が現存する。3) は他の資料と異なり、チベット文字が西夏文字の左側に、朱字で記されているという特徴的な外見を持つ。そして「須菩提」のような音訳語には、略されたためかチベット文字が付されていない。

いずれの断片も巻首や奥書を欠いており、その成立年代については11世紀初頭から13世紀初頭の期間のものとししか推測できない。

ただし、資料1)のチベット文字表記を西夏語音韻論の研究に利用することについては慎重な検討を要する。理由となる特徴の一つは、繰り返し現れる偈文に対してチベット文字転写が省略されること、もう一つは2)、3)に比べ、転写の際、チベット文字の添前字がほとんど使用されないことである²⁶⁷。この二点から1)は2)、3)に比べ精密な資料として利用できるとは言いがたい。よって本稿のデータとしては、1)の利用を控えた。

²⁶⁵ 旧整理番号108b。荒川(1997)で夏藏対音資料として利用した。

²⁶⁶ 筆者の内容比定によりこの断片は『金剛般若波羅密經』の一部であることがわかった。同じ部分が東方学研究所蔵 Танг. 386, инв № 101 『金剛般若波羅密經』(鳩摩羅什漢訳の重訳)に確認できる。

²⁶⁷ この理由がそれぞれの資料を記したチベット語の年代差、地域差を反映するということが当然推測できるが、現時点では論証はできない。

1.3 大英博物館所蔵夏藏対音資料

夏藏対音資料は、1.2で略述した東方学研究所所蔵資料の他に、大英博物館所蔵スタイン収集品が存在する。Driem and Kepping (1991) によればこの資料は4断片からなる名称不明仏典である。一部は公開されるとともに、ラウファーによってチベット文字部分がローマ字に翻字された²⁸⁸が、未だ全資料の公開はなされていない。東方学研究所所蔵資料同様、Driem and Kepping (1991) に簡潔に紹介されている。

本稿では、Stein (1928) に影印版が収録される一断片をデータとして利用した。

2. 西夏語の声調

2.1 西夏語の声母と韻母

西夏語の一音節は、CV(C)/T (T=tone) の形式を持ち、通常西夏文字一文字で表記される。西夏語韻書は、漢語音韻学に倣い、CV(C)/T を C- (初頭子音) と -V(C)/T (初頭子音を除く音節の残りの部分) に分けて記述した。漢語音韻学の名称に従い、以下ではこの C- を「声母」、-V(C)/T を「韻母」と呼ぶ。

本稿は西夏語声母の推定音再構が主旨ではないが、後述するように西夏語の声母と声調は密接な関わりを持つため、西夏語韻書における分類をもとにその下位分類を含め述べておく必要がある。

西夏語音韻学は、声母の系列を、主に調音部位に従って九種類—重唇音類 (p, ph, b, m) ・軽唇音類 (f, v, w) ・舌頭音類 (t, th, d, n) ・舌上音類 (ty', thy', dy', ny') ・牙音類 (k, kh, g, ng) ・歯頭音類 (ts, tsh, dz, s) ・正歯音類 (c, ch, j, sh) ・喉音類 (', h) ・流風音類 (l, lh, ld, z, r, zz) —に分ける。以下ではこれらを「声母系列」と呼ぶ。() 内に示した下位分類のように、『文海』などの韻書においては、無声無気音、無声有気音、有声音、鼻音の順に声母が分類されていた。本稿では、声母系列は西田 (1989) の下位分類に従うが、各声母の表記は筆者が改めた²⁸⁹。

西夏語韻母は、平声97韻・上声86韻と細分化されていたことが韻書から判明している。2.2で述べる声調の対立を除くと、韻母の形式が同じ韻類、すなわち通韻は105韻に分類される。本稿は韻母の推定を目的とするものではないため、最低限この105韻の分類が区別できるよう表記するにとどめた。転写法は参考資料に示した。声調を除いた西夏文字の推定音には、韻書『文海』などの反切を利用して再構成した推定音をあてはめている。

²⁸⁸ FRAGMENT OF HSI-HSIA (TANGUT) MS. ROLL, K.K. II. 0234.k, WITH INTERLINEAR TRANSLITERATION FROM KHARA-KHOTOとして、Stein (1928) にて影印とチベット文字の翻字が掲載されている。

²⁸⁹ 流風音類 z と zz は西田の推定する z と vz とに相当する。ただしこの二種は本稿で扱った資料のチベット文字では区別されず、ともに z で表記される。

2.2 西夏語韻書中の「声調」

西夏語の声調には、「平声」と「上声」が存在し、韻書にも区別されて記されていたが、その発音・調値に関する、西夏人自身の具体的な記述は今のところ見つかっていない。「平声」と「上声」とは、その声調を表した西夏文字^{註10}に、対応する漢字を当てたものであり、漢語の平声・上声に相当するものとは限らない。すなわち、韻書に確認できるすべての西夏文字は平声と上声のどちらかに分類はされているのであるが、その具体的な調値が不明のままということになる。本稿で各西夏文字に付した平声・上声とは、西夏語韻書によって確認したものである。声調の帰属が不明の文字については本稿のデータとしては利用していない。

これまでの研究では、西夏語の声調の具体的な調値は検討されてこなかった。また、推定の根拠となる資料についても、西田（1964）で、西夏語の声調とチベット文字転写の比較が、数種類の音節について行われたが、総合的な考察はその後進展しなかった。

2.3 西夏語の声調に関する先行研究

前述したNevsky（1926）では、チベット文字の子音結合による西夏語の表記がおそらく何らかのアクセントに関するものと述べられているが、具体的にどの表記がどのようなアクセントを示したかについては言及されてはいない^{註11}。

西田（1964: 139-140）では、「西夏語自体には、l-に先行する副次的構成素は存在しなかったけれども、チベット文字表記では、そのトネームを表記するため、ときにgl-, kl- が用いられた」と、西夏語音とチベット文字表記の関係を述べている。

「（チベット文字）gl-, kl- は平声韻を、l- は上声韻を表記するのが原則」であり、チベット語の諸方言では、l- の初頭子音を持つ音節は低声調、gl-, kl- の初頭子音を持つ音節は高声調であるから、文中では明言はされていないが、西夏語平声はチベット語の高声調、西夏語上声はチベット語の低声調に関係する、という仮説を提示していることになる^{註12}。

^{註10} それぞれの文字は 𐵑 と 𐵒 である。以下の例はともに李范文編著（1997）より。

𐵑 は、『文海』の字義注には「平坦也，廣平也」（『文海』平声39韻）とある。

𐵒 は 𐵒 𐵑 「上来」（『同音』重唇音類）などに見られる。

^{註11} Nevsky（1926: 24-25）の序文より。この字典の利用に関する問題点をあげるとすれば、各西夏文字の韻書による分類が記されない、つまり声調や韻母の分類が不明であるということと、各チベット文字転写の出典や転写の揺れの度数が記されていないという点である。無論これは字典の主旨ではなく、その価値を下げるものではない。

^{註12} ただし西田はその後の研究でこの論考を発展させることはなかった。西田（1989）の「音韻体系」の項で、韻書中の重紐（同一の音節の、一見過剰と考えられる分類）と声調とを関係付け、同じ平声（に分類されるもの）でも声調のレジスターが違ったものが存在するという仮説を示している。ここでは西田はその具体的な調値の推定はさけている。本考察のデータからは重紐にみられる最小対の例を確認できなかったため、この点について言及することはできなかった。

しかし同時に「bl-によって表記される小類は、つねに上声韻」という例外も報告されている。これが事実なら、西夏語上声は高声調と関係づけられることになり、上述の仮説と矛盾することになる。この点に関しては4.1.5で述べたい。

また、流音以外の声母、すなわち鼻音に関しては、添前字の有無と声調の関係について言及されていない。本稿での考察によってこれらを検討したい。

2.4 夏藏対音資料以外の他言語対音資料における西夏語の声調

2.4.1 西夏語の声調と漢語の四声の関係

12世紀に編纂された『番漢合時掌中珠』は、西夏語－漢語の対照語彙集である。西夏文字で記された西夏語語彙について、それに相当する意味、発音が漢字によって付され、また西夏語の意義に相当する漢語の発音も西夏文字によって記されている。すなわちこの資料は、西夏語によって漢語音を記した資料であり、かつ漢語によって西夏語音を記した対音資料であるといえる。

本資料は、先行研究において、西夏語の声母、韻母の推定に活用されたが、西夏語の声調に関して利用可能なデータと考えられるであろうか。荒川（1997）で利用した漢語対音資料のデータから、簡単に再考してみたい。

漢語によって西夏語音を記した対音資料（漢語→西夏語 対音資料A）において、西夏語・漢語の、声調の帰属が判明した対応関係は1120例存在する。西夏語の平声・上声と漢語の四声がどのように対応するかは以下の表のようになる。

西夏語の声調と漢語の四声の関係（漢語→西夏語 対音資料A）

Tan.声調\漢語四声	平声	上声	去声	入声	計
平声	262	61	43	221	587
上声	160	94	64	215	533

西夏語によって漢語音を記した対音資料（西夏語→漢語 対音資料B）において、漢語・西夏語の、声調の帰属が判明した対応関係は1101例確認できるが、上のような対応は以下のようになる。

西夏語の声調と漢語の四声の関係（西夏語→漢語 対音資料B）

Tan.声調\漢語四声	平声	上声	去声	入声	計
平声	381	132	133	125	771
上声	113	77	66	74	330

入声音節を考慮に入れないとしても、西夏語の平声・上声が漢語の四声と関係しているとはこのデータからは考え難い。従って、西夏語の声調の推定に関して漢語音を利用することは有効な手段とは言い難い。

2.4.2 西夏語の声調とサンスクリット対音の関係

仏典中の陀羅尼は、西夏語音によってサンスクリット音を表記した対音資料である。荒川(1995)において、一般的に確認できた傾向としては、「西夏語音節でサンスクリット音を表記する場合、同一の音節に対して平声より上声によって転写されることが多い」点があげられた。例えば、サンスクリット音節 *ti* を西夏語音節で転写する場合は、平声音節の 𑖇 *1ti:* によってではなく、上声音節の 𑖈 *2ti:* によって行われる。すなわち、声調の別をのぞくと同一の音節（そしてそれを表す西夏文字）がある場合、サンスクリット音の転写には上声音節が利用されたということである。サンスクリット音節 *ta* の転写が、西夏語音節上声音節の *2ta:* によってではなく、平声音節の 𑖇 *1ta:* によって行われるのは、上声音節の *2ta:* を表す西夏文字が存在しないためと考えられる。

西夏語の声調とサンスクリット対音は、以上のような点で対応にやや規則性がみられるものの、声調の具体的な調値の推定に関して、利用価値のある資料とはいえない。

3. 夏蔵対音資料にみられるチベット文字とチベット語

3.0 チベット文字について

CC- の子音連続を表す、添前字 (prefixed letter) + 基字 (root consonant letter) と添頭字 (superfixed letter) + 基字は、チベット文字の正書法上は区別されるものである。添前字と添頭字のふたつが基字に付加されることもある。しかし、本稿で扱う夏蔵対音資料には、添前字と添頭字がともに基字に付加される例はほとんど見られないため、特に断る必要がない場合、本稿では C₁- として両者を区別せず表記した。また、正書法上は、C₁- の子音連続の転写は C- が基字、l- が添足字 (subfixed letter) といわれるが、本稿では添頭字 C- + 基字 l- として扱う。

夏藏対音資料のチベット文字の例と本稿での表記

子音

ka	ཀ	kha	ཁ	ga	ག	nga	ང
ca	ཅ	cha	ཇ	ja	ཉ	nya	ཏ
ta	ཏ	tha	ཐ	da	ཌ	na	ཎ
pa	པ	pha	ཕ	ba	བ	ma	མ
tsa	ཅ	tsha	ཇ	dza	ཌ	wa	ཌ/ལ
zha	ཇ	za	ཇ	'a	ཨ	ya	ཡ
ra	ར	la	ལ	sha	ཤ	sa	ས
ha	ཀ	a	ཨ				

母音^{注13}

i ཨི u ཨུ e ཨེ o ཨོ

渡り音

-y- ཨིལ -w- ཨུལ

注意を要する表記

rgyu རྒྱུ khyu རྒྱུ me རྒྱུ me རྒྱུ

3.1 夏藏対音資料のチベット文字表記の特徴

3.1.1 西夏語の初頭子音とチベット文字添前字で表記される子音の関係

夏藏対音資料では、西夏語の初頭子音 C- がチベット文字 C1-C2- または C1C2- で転写される場合がある。その際、C1- は具体的な西夏語子音に対応せず、C2- が西夏語の初頭子音に対応している。

例 Tan. 慨 lmi: 平声11韻「<否定辞>」— Tib. d-mi (14.4.8)

この西夏語音節の声母は、サンスクリット音節の初頭子音 m- と対応し、漢語の明母に対応するから、チベット文字添前字 d- が何らかの子音結合を表記したものとは考え難い。

では、このようなチベット文字 C1- はどのような機能を持っていたのが問題となる。

^{注13} チベット文字の母音符号には、l を左右に反転させたものも存在するが、資料中には確認できなかった。

3.1.2 チベット文字 C1- の種類と機能

夏藏対音資料に見られる、添前字・添頭字 C1- は g-, d-, b-, m-, '-, s-, r-, l-²¹⁴ である。用例が少ないものからその種類と機能について述べる。

添前字 m-, s- は用例が少なく、その機能が判然としない。

添前字 '- は、基本的には西夏語の前鼻音化有声音声母の入り渡りの鼻音部分に対応する。

添頭字 r- は西夏語の声母とは対応せず、捲舌母音と推定される韻母と対応する。かつて添後字の -r は、捲舌音韻母の例証とされたが、添頭字の r- が捲舌音韻母に対応すると考えられる例も資料には見いだされる。

例 Tan. 𑖇 1nur, 「指」 - Tib. rnu (9.8.6)

Tan. 𑖇 1tsyer, 「法」 - Tib. rtse (4.2.6)

どのような基準で添頭字、添後字の使い分けが行われるのか、いまだ検討の余地は残るが、この r- が捲舌音韻母を表記するために使用されたことは間違いない。

C1- のうち、g-, d-, b-²¹⁵ などが、類出するもののその機能が判然とせず、具体的な西夏語初頭子音と対応しないことが確認できる。また、鼻音・流音の初頭子音と結びついて記される例が顕著に見られる。このことは、当時夏藏対音資料を記したチベット語とチベット文字の関係から検討しなければならない。

3.2 チベット語の音変化と綴り字との関係

チベット語の特定の方言は、通時的变化のある段階で、先行子音 C1- の音を失い、代わりに声調の対立が生じたことが知られている。またチベット語の通時的な変化として、有声音声母の無声化したことと、その代償として声調が発生（低声調化）したことが知られる。このことから11～13世紀、夏藏対音資料を記したチベット語の一方言において、先行子音の音価が失われ、声調の区別が生じたことは年代的には十分考えられる。従って、C1- を表すチベット文字は、西夏語音節の声調の相違を表すために使用されていた可能性がある。

²¹⁴ 添頭字 l- とは正書法上、lh- を表す場合のみ、基字 h- との結合形で現れる。本稿ではこの添頭字は扱わない。

²¹⁵ 添前字 b- について、聶鴻音 (1998) は、「介音 u」を表すものとしている。例えば、bku は実際には kuo と読まれ、bsi は実際には sui と読まれる、という (表記は聶のもの。ただし具体的な語彙はあげられていない)。聶鴻音 (1998: 126) より。

西夏語の韻母には確かに介音 (本稿の表記では w) が存在し、漢語の対音資料からも確認できるが、本稿第4節でみられる例のように、必ずしも介音 w は添前字 b- で表記されるわけではないし、添前字 b- が転写している音節が介音を持たないという場合も多い。

4. 夏蔵対音資料による西夏語の声調の考察

4.1 夏蔵対音資料

現代チベット語（ラサ方言など）では、添前字や添頭字が付加された際、以下の初頭子音を持つ音節－鼻音（ng-, ny-, n-, m-）、流音（l-）、半母音（y-）－は「高声調」で発音される、という基本規則がある。これは子音連続を示すものではなく、綴り字が声調の対立に対応して残っているというものである。この規則が、本資料の西夏語音を転写したチベット語の一方言にも適用できるならば、西夏語の子音に対応しない添前字や添頭字の出現が説明できる。

従って、チベット語の鼻音・流音系列の文字で転写される西夏語音節が、本考察の手がかりとなる。声母に鼻音・流音を持つ声母系列は、重唇音類、舌頭音類、舌上音類、牙音類、流風音類の五種類である。

4.1.1 重唇音類の鼻音声母 m-

重唇音類の鼻音声母 m- を初頭子音に持つ音節を、チベット文字で転写する際、添前字、特に d- が付加される場合が多く、その音節は平声である場合が多い。例外のうち、大多数の例では添前字が付加される 𐵓 「<否定辞>」の4例に添前字が付加されないのは誤記と考えられる。また、平声であり、なおかつ添前字が付加されないのは 𐵑 「施し」、𐵒 「母」など特定の文字の転写に限られる。

一方、添前字が付加されない場合は、上声である場合が多い。例外の過半数を占めるのは 𐵓 「種」の転写5例であり、この文字の転写には添前字の有無に揺れがある。

例 Tan. 𐵓 1mi: 平声11韻「<否定辞>」－ Tib. d-mi (8.6.14)

Tan. 𐵑 2me: 上声35韻「下」－ Tib. me (6.10.17)

m- を初頭子音に持つ西夏語音節のチベット文字転写の例数は以下ようになる。

Tib.C1-\Tan.声調	平声	上声
∅-	14	24
g-	1	0
d-	32	6
'-	0	2
C1- 計	33	8
総計	47	32

4.1.2 舌頭音類の鼻音声母 n-

舌頭音類の鼻音声母 n- を初頭子音に持つ音節をチベット文字で転写する際、添前字 g- が付加される場合は、必ずその声調は平声である。例外のうち、𐵑 「心」（計2例）に添前字が付加されないのは誤記と思われる。𐵑 「故、因」は添前字

が付く例が13例、付かない例が6例と、転写に若干の揺れがある。ただし、正書法規則では可能な添前字 b- は確認できなかった。

添前字が付加されない場合は上声であることが多い。

例 Tan. 𪛗 1nyI' 平声32韻「二」 - Tib. g-ni (S.6.21)

Tan. 𪛘 2nI: 上声28韻「～など」 - Tib. ni (7.6.3)

n- を初頭子音に持つ西夏語音節のチベット文字転写の例数は以下ようになる。

Tib.C1-\Tan.声調	平声	上声
∅-	10	62
g-	46	0
C1- 計	46	0
総計	56	62

4.1.3 舌上音類の鼻音声母 ny'-

舌上音類の鼻音声母 ny'- を初頭子音に持つ音節は、韻書内でも最も少ない字数のグループであり、資料中でもほとんど確認できない。チベット文字転写の際、添前字 ' が付加される平声韻の例は、1) の資料に一例だけ確認できた。一方、資料を見る限り、上声韻音節の転写の際には、添前字は付加されない。

例 Tan. 𪛙 1ny'en 平声41韻「濁」 - Tib. '-nged (5.7.4) ^{註16}

Tan. 𪛚 2ny'o:n 上声49韻「悪」 - Tib. nyo (7.4.22)

ny'- を初頭子音に持つ西夏語音節のチベット文字転写の例数は以下ようになる。

Tib.C1-\Tan.声調	平声	上声
∅-	0	4
'-	1	0
C1- 計	1	0
総計	1	4

4.1.4 牙音類の鼻音声母 ng-

牙音類の鼻音声母 ng- を初頭子音に持つ音節に対して、転写の際、添前字、特に b- が付加される場合がやや多く、その声調は平声である。𪛛 「空」 (計10例) と 𪛜 「五」 (計6例) に1例ずつ添前字が表記されない場合があるが、これは明らかな誤記と考えられる。

一方、添前字が付加されない場合、そのほとんどは上声韻音節である。例外となる、上声韻に属する音節でありながら、添前字を持つものは、𪛝 「善」 (4例全

^{註16} 舌上音類の鼻音声母であり、平声に属する音節はこの一例しか確認できなかった。ただし、西夏語舌上音類の声母を転写したチベット文字の対応には疑問が残る。

て d- が付加される)、**麻** 「一切」 (4 例全て b- が付加される) など、特定の文字の転写がほとんどである。

例 Tan. **嶺** 1ngu' 平声 5 韻「唱える」 - Tib. d-ngu (15.2.6)

Tan. **殺** 2ngu 上声 1 韻「を以て」 - Tib. ngu (11.2.2)

ng- を初頭子音に持つ西夏語音節のチベット文字転写の例数は以下ようになる。

Tib.C1-\Tan.声調	平声	上声
∅-	3	58
d-	13	4
b-	17	5
C1- 計	30	9
総計	33	67

4.1.5 流風音類の流音声母 l-

西夏語の流風音類の流音声母 l- を初頭子音に持つ音節に対して、基字 (k-, g-, b-) + 添足字 -l-、または添前字 + 基字 l- で転写する例は、その音節が上声であるより、平声である場合が多い。例外のうち、**嶺** 「風」は添頭字が付く例が 2 例、付かない例が 2 例と、転写に揺れがある。**殺** 「～也」(計 8 例)には添前字 g- の付加と添頭字 g の付加の例が 1 例ずつ確認できる。

一方、基字 l- のみで転写する場合は、上声であることが多い。上声韻に属する音節でありながら、添頭字を持つものは、**殺** 「固」**嶺** 「墓」など特定の文字の転写に限られる。

例 Tan. **身** 1leu 平声 43 韻「一」 - Tib. gli (10.1.6)

Tan. **身** 2lywuq 上声 52 韻「身」 - Tib. lu' (14.7.12)

l- を初頭子音に持つ西夏語音節のチベット文字転写の例数は以下ようになる。

Tib.C1-\Tan.声調	平声	上声
∅-	8	30
k-	5	2
g-	14	4
b-	4	7
C1- 計	23	13
総計	31	43

西田 (1964) は「bl- によって表記される小類は、つねに上声韻」と述べているが、確かに bl- によって転写される上声音節も存在するが、平声音節でありながら bl- によって転写される例も確認できた。

例 Tan. **子** 1li: 平声 11 韻「子」 - Tib. b-li (8.10.7)

したがって、bl- によって表記される小類は、つねに上声韻とは限らない。

4.2 西夏語の声調とチベット語音節の声調の関係

4.1であげた、鼻音・流音を初頭子音に持つ西夏語音節のチベット文字転写対応例の総数を整理すると、以下のようになる。

Tib.C1-\Tan.声調	平声	上声
∅-	34	178
C1- 計	133	30
総計	167	208

西夏語の鼻音・流音の音節に関しては、C1- が付加される場合と付加されない場合があり、その音節が所属する声調を調べると、付加される場合は平声韻であり、付加されない場合は上声韻である場合が多い。

すなわち夏藏対音資料から見れば、西夏語の平声音節はチベット文字転写の際にC1- が付加される。つまり、チベット語では高声調で表されている、と考えられる。一方、西夏語の上声音節はチベット文字転写の際にC1- が付加されない。つまり、チベット語では低声調で表されている、と考えられる。

鼻音・流音以外の音節について、チベット文字の添前字が付加される例が少ないのは、もともと高声調のチベット語音節にC1- を付加しても、声調は高声調のまま変化しないので、チベット文字の表記法上、西夏語の声調の区別を表記できなかったためと考えられる。

5. まとめ

夏藏対音資料から次の点を確認することができた。

1. 西夏語の一音節に対して、チベット文字の添前字などの形で、あたかも子音結合のような転写がみられる場合がある。それは声母が鼻音・流音である場合が特に多い。

2. 中でもC1- が付加される音節は、西夏語韻書では平声韻と呼ばれる音節に属するものであり、付加されない音節は、上声韻と呼ばれる音節に属するものであることが顕著にみられる。

この分布は偶然によるものとは考えられず、チベット文字によって声調の別が区別されて表記されていたと考えられる。

以上により、西夏語の平声は高声調、上声は低声調であったと考えるのが妥当であろう。さらに、西夏文字の「平」・「上」という表記から考えれば、西夏語の平声韻は、高声調で始まりそのまま平板な型の「高平調」であり、西夏語の上声韻は、低声調で始まりその後上昇する型の「低昇調」である、と推定できよう。おそ

らく西夏語の声調は、基本的には高低で音韻的な対立を成し、そのうちの低声調が、音声的には上昇調のものと観察されたため、「上声」と呼ばれたのであろう。

本稿は、西夏語の声調の具体的な調値について考察を試みたものであったが、同時に、西夏語音を記した11～12世紀のチベット語のある特定の方言が、声調の対立を持つものであったことも示唆することとなった。これが年代的に妥当なものであるのかどうかは、他言語の資料も加味して、今後も検討を重ねる必要がある。

《参考資料》

本稿における西夏語音転写法

1. 声調

平声 1
上声 2

2. 声母

重唇音類	p	ph	b	m	
軽唇音類	f		v	w	
舌頭音類	t	th	d	n	
舌上音類	ty'	thy'	dy'	ny'	
牙音類	k	kh	g	ng	
齒頭音類	ts	tsh	dz		s
正齒音類	c	ch	j		sh
喉音類	'	h			
流風音類	l	lh	ld		z r

3. 韻母

通韻番号、韻書による平声の番号、対応する上声の番号、表記、の順で記した。
以下の通韻表からは省略したが、合口韻は w によって表記する。
従来の撮というレベルのグループ化が不可能な通韻 1 0 0 番以降は荒川の想定する環に分類する。

等	第1環	第2環	第3環
	第1撮	第8撮	第14撮
1	R.1 平1=上1 u	R.61 平58=上51 uq	R.80 平75=上69 ur
2a	R.2 平2=上2 yu	R.62 平59=上52 yuq	R.81 平76=上70 yur
2b	R.3 平3=上3 yu		
3	R.4 平4=上4 u:		
1	R.5 平5=上5 u'		
2	R.6 平6 yu'		
3	R.7 平7=上6 u:'		
	第2撮	第9撮	第15撮
1	R.8 平8=上7 i		R.82 平77=上71 ir
2	R.9 平9=上8 yi	R.63 平60=上53 yeq	R.83 平78 yir
3a	R.10 平10=上9 i:		
3b	R.11 平11=上10 i:		R.84 平79=上72 i:r
1	R.12 平12=上11 i'		
2	R.13 平13 yi'		
3	R.14 平14=上12 i:'		
1	R.15 平15=上13 in	R.64 平61=上54 enq	
2	R.16 平16 yin	R.65 平62=上55 yenq	
	第3撮	第10撮	第16撮
1	R.17 平17=上14 a	R.66 平63=上56 aq	R.85 平80=上73 ar
2	R.18 平18=上15 ya		R.86 平81 yar
3a	R.19 平19=上16 a:	R.67 平64=上57 a:q	R.87 平82=上74 a:r
3b	R.20 平20=上17 a:		

(第1環)

4 R.21 平21=上18 ya:
 1 R.22 平22=上19 a'
 2 R.23 上20 ya'
 3 R.24 平23=上21 a:'
 1 R.25 平24=上22 an
 2 R.26 平25=上23 yan
 3 R.27 平26=上24 a:n

(第2環)

(第3環)

R.88 平83 ar'
 R.89 上75 yar'

第4攝

1 R.28 平27=上25 I
 2 R.29 平28=上26 yI
 3a R.30 平29=上27 I:
 3b R.31 平30=上28 I:
 1 R.32 平31 I'
 2 R.33 平32=上29 yI'

第11攝

R.68 平65=上58 iq
 R.69 平66=上59 yiq
 R.70 平67=上60 i:q
 R.71 平68 iq'
 R.72 平69=上61 i:q'

第17攝

R.90 平84=上76 Ir
 R.91 平85 yIr
 R.92 平86=上77 I:r

第5攝

1 R.34 平33=上30 e
 2 R.35 平34=上31 ye
 3a R.36 平35=上32 e:
 3b R.37 平36=上33 e:
 1 R.38 平37=上34 e'
 2 R.39 平38 ye'
 3a R.40 平39=上35 e:'
 3b R.41 平40 e:'
 1 R.42 平41=上36 en
 2 R.43 平42=上37 yen

第18攝

R.93 平87=上78 er
 R.94 平88=上79 yer

第6攝

1 R.44 平43=上38 eu
 2 R.45 平44=上39 yeu
 3a R.46 平45=上40 eu:
 3b R.47 平46 eu:
 1 R.48 上41 eu'
 2 R.49 平47 yeu'

第7攝

1a R.50 平48 o
 1b R.51 平49=上42 o
 2 R.52 平50=上43 yo
 3 R.53 平51=上44 o:
 1 R.54 平52=上45 o'
 2 R.55 平53=上46 yo'
 1 R.56 平54=上47 on
 2 R.57 平55=上48 yon
 3 R.58 平56=上49 o:n
 1 R.59 平57 o"
 2 R.60 上50 yo"

第12攝

R.73 平70=上62 oq

第19攝

R.95 平89=上80 or
 R.96 平90=上81 yor
 R.97 平91=上82 o:r

R.74 平71=上63 onq
 R.75 平72=上64 oq

R.98 上83 wor
 R.98 上84 ywor

第13攝

1 R.76 上65 eq2
 2 R.77 平73=上66 yeq2
 1 R.78 上67 eq'2
 2 R.79 平74=上68 yeq'2

(第1環)

(第2環)

(第3環)

R.100 平92=上85 ylr
R.101 平93=上86 yer2

R.102 平94 woq2

R.103 平95 ya:n
R.104 平97 un
R.105 平98 ua

※凡例

1ma 重唇音類 平声17韻
2chwa: 正齒音類 上声16韻

《参考文献》

荒川慎太郎

1995 「サンスクリット音転写規則から見た西夏語音の考察—西夏文陀羅尼を用いて—」(京都大学卒業論文)。

1997a 「韻書の構成法からみた西夏語音の研究—等韻の構造に関する一考察—」(京都大学大学院修士論文)。

1997b 「西夏語通韻字典」『言語学研究』第16号。

Driem, G. v. and Kepping, K. B.

1991 "The Tibetan transcriptions of Tangut (Hsi-hsia) ideograms." *LTBA* vol. 14:1.

Gong Hwang-chern

1981a "Voiced Obstruents in the Tangut Language."『中央研究院歷史語言研究所集刊』52.

1981b 「西夏韻書同音第九類聲母の擬測」『中央研究院歷史語言研究所集刊』52.

1981c 「十二世紀末漢語の西北方言」『中央研究院歷史語言研究所集刊』52.

1988 "Phonological Alternations in Tangut."『中央研究院歷史語言研究所集刊』59.

1989 "The phonological Reconstruction of Tangut through Examination of Phonological Alternations."『中央研究院歷史語言研究所集刊』60.

1993a "A Hypothesis of Three Grades and Vowel Length Distinction in Tangut." (paper presented at the 26th International Conference of Sino-Tibetan Languages and Linguistics).

1993b 「西夏語の音韻転換與構詞法」『中央研究院歷史語言研究所集刊』64.

1994 "A hypothesis of three grades and vowel length distinction in Tangut." *Journal of Asian and African Studies*. Nos. 46-47.

Горбачева, З. И. и Кычанов, Е. И.

1963 *Тангутские рукописи и ксилографы*, Издательство восточной литературы, Москва.

Кеппинг, К. Б., Колоколов, В. С., Кычанов, Е. И., Терентьев-Катанский, А. П.

1969 *Море писем, факсимиле тангутских ксилографов*. тт. 1-2. Издательство восточной литературы, Москва.

李范文

1986 『同音研究』, 寧夏人民出版社, 銀川.

李范文編著

1997 『夏漢字典』, 中国社会科学出版社, 北京.

羅福成

1935 『西夏國書字典音同』, 旅順.

Невский, Н. А. (Nevsky, N. A.)

1926 『西藏文字対照西夏文字抄覧』 (亜細亜研究第四号), 大阪東洋学会.

1930 「西夏國書殘經釋文」 『國立北平圖書館館刊』 第四卷第三号.

1960 *Тангутская филология*. тт. 1-2. Издательство восточной литературы, Москва.

聶鴻音

1998 『中国文字概略』, 語文出版社, 北京.

西田龍雄

1964 『西夏語の研究—西夏語の再構成と西夏文字の解説』 I, 座右宝刊行会.

1966 『西夏語の研究—西夏語の再構成と西夏文字の解説』 II, 座右宝刊行会.

1967 『西夏文字—その解説のプロセス』, 紀伊国屋書店 (rep.1994) .

1980 『西夏文字—解説のプロセス』 (1967の増補版), 玉川大学出版部.

1981 「西夏語韻図『五音切韻』の研究 (上)」 『京都大学文学部研究紀要』 20.

1982 「西夏語韻図『五音切韻』の研究 (中)」 『京都大学文学部研究紀要』 21.

1983 「西夏語韻図『五音切韻』の研究 (下)」 『京都大学文学部研究紀要』 22.

1989a 「西夏語」 『言語学大辞典』 中巻, 三省堂.

1989b 「チベット語 (文語)」 『言語学大辞典』 中巻, 三省堂.

1996 「死言語の復元と表意文字の解説—西夏語と西夏文字の特性—」 『月刊言語』 8月号.

1997 『西夏王国の言語と文化』 岩波書店.

Совронов, М. Б.

1968 *Грамматика тангутского языка*. тт. 1-2. Наука, Москва.

1976 "Дешифровка тангутского письма," *Тайны древних письмен*, Прогресс, Москва.

史金波・白濱・黄振華

1983 『文海研究』, 中国社会科学出版社, 北京.

Stein, A

1928 *Innermost Asia*, the Clarendon Press, Oxford.

高田時雄

1988 『敦煌資料による中国語史の研究』, 創文社, 東京.

1990 「レニングラードにあるチベット文字転写法華経普門品」 『内陸アジア言語の研究』 VI.

1991 「レニングラードにあるチベット文字転写法華経普門品 (続)」 『内陸アジア言語の研究』 VII.

王静如

1932-33 『西夏研究』 第1輯-第3輯, 国立中央研究院歴史語言研究所, 北京.

Weidert, A

1987 *Tibeto-Burman Tonology* (Current Issues in Linguistic Theory. Vol. 54), John Benjamins Publishing Company, Amsterdam/Philadelphia.

Wolfenden, S. N.

1931 "On the Tibetan Transcription of Si-hia Words." *JRAS* 1931.

(あらかわ しんたろう、京都大学大学院)

A Study on the Tone of Tangut from Tibetan Transcriptions

Shintaro ARAKAWA

Summary

In the Tangut materials, there are Buddhist fragments with Tibetan transcriptions. I researched mainly the materials in St. Petersburg Branch of the Institute of Oriental Studies and studied the tone of Tangut. According to some Tangut phoneticians, it is said that there were two basic tones -平 *level* tone and 上 *raising* tone- in Tangut, but descriptions of the value of Tangut tones have not been shown.

This study shows that syllables of *level* tone were transcribed as CCV in Tibetan script because C₁- was added to the basic transcription CV, and that syllables of *raising* tone were transcribed in CV. That is to say, in Tibetan transcription, the syllables of *level* tone were expressed as high tone and the syllables of *raising* tone as low tone. Moreover, according to the meanings of the Tangut characters, I have come to the conclusion that *level* tone was the high-level tone and the *raising* tone was low-raising tone.